



新世紀のキャンパス

Campus of New Century

東洋大学 板倉キャンパス 5号館



「シーズ(生命の種)」をモチーフに、ガラス張りの外壁となだらかな曲線が美しい5号館外観。



周辺には森林、農地、わたらせ遊水地などがあり、広大な敷地と充実した設備という研究環境に恵まれた板倉キャンパス。



中心部を縦断するメカニカルボイドは、配管やガスポンベ、機械の出入、メンテナンスなどを外部の目に触れさせない安全性に優れた機能を持つ。



種(シズ)をイメージしたゆるやかなカーブを描く外廊下は、研究交流の場でもある。



試験管の中身はアカパンカビ。農薬のメカニズムや体内時計の分子メカニズムを解明している環境応答実験室。

実験室はガラス張りで開放的。高校生の見学者などに見られることで、姿勢を正し、整理整頓も心がけるようになった。



コラボレーションスペースは、ラボ間の教員・学生のコミュニケーションを高め、視野を広げる役目を持つ。



東洋大学は2009年、板倉キャンパスの生命科学部を拡充し、生命科学科に加え、応用生物科学科、食環境科学科を設置、3学科体制とした。2010年4月には、「シズ(生命の種)」をイメージした5号館(実験棟)も誕生。「近年、安全な食品の生産・確保は国際社会の最重要課題。食育や食文化の教育も重視している。板倉の広大な土地を活用し、美しく充実した実験室を用意した」と語るのは竹村牧男学長だ。

生命科学の領域にいち早く着目し、当時は珍しかったこの領域も急速に拡大した。そこで「学問の範囲を拡げつつ、個々の教育分野を掘り下げることにした」(大熊廣一生命科学部長)という。学部3大テーマである「生命」「環境」「食」をキーワードに、生命科学科では「いのち」の解明と基礎研究、応用生物

科学科では環境に優しい「ものづくり」、食環境科学科では「食」の安全や食育を教えることで、食品・化学関連で活躍できる人材を育成する。

新しい実験棟の5号館は、3階建ての各階を学科ごとに区分け、配色した。1階は生命科学科で海洋生命をイメージした青、2階は応用生物科学科で環境をイメージした緑、3階は食環境科学科でトマトなど食をイメージした赤である。館内には、「実験室」が36室、共有の機器を集約した「共通機器室」が10室、2つの実験室をつなぐ共有空間「コラボレーションスペース」が18室配置されている。

群馬県には食品企業も多く、これまでも色鮮やかな大根「紅しぐれ」、バラの香り成分が含まれた人参「アロマレッド」を開発し、地域の特産品にするといった地域貢献を行ってきた。2010年

10月には、県や県内企業15社と「東洋大学LiFE研究会」を発足、地域密着をさらに深める。一方、今年から板倉で陸上競技部女子長距離部門が活動を開始。食環境科学科が、アスリートの食の研究とサポートを行うという。

発信力にも長けている。ウェブサイトにアドミッション・カリキュラム・ディプロマポリシーを掲げ、それを教員が受験生に直接伝えるために、年間300校以上の高校訪問を行う。「受験生にとって、どんな教育を受けられ、将来どんな方面へと進むかは非常に重要な情報。ミスマッチのない進学を目指してほしい」(清水範夫前学部長)。これらの取り組みが受験生の認知度を着実に高めており、志願者数は3年連続増加、学生のレベルも上がっているという。

(取材・文／能地泰代)



ライトアップされた5号館。3色の学科のイメージカラーが美しく浮かび上がる。